

高台移転に伴う空間変容と利用実態
— 女川町竹浦集落を事例として —

22018004 安蒜 美羽
指導教員 葉袋 奈美子 教授

漁村集落 東日本大震災 高台移転
自立再建住宅 災害公営住宅 地域コミュニティ

1. 研究の背景・目的・調査概要

2011 年東日本大震災で甚大な被害を受けた三陸沿岸部は防災集団移転促進事業によって高台移転が行われた。

本研究では宮城県牡鹿郡女川町竹浦集落を事例として、住生活について調査をし、高台移転後の空間変容とその利用実態を明らかにする。

調査は 2023 年 7.29～31 日、9 月 10・11 日、10 月 30 日～11 月 3 日、2024 年 1 月 2 日の現地調査を主とした。その中で、集落内に住む 11 世帯 15 名へのヒアリング調査を行い、震災前の暮らしから現在に至るまでの住まいの変遷や「海を見る場所」「さかなを捌く場所」等について明らかにした。またその内、3 世帯の漁業者には、漁業の変化についても調査し、7 世帯の自立再建世帯には住宅の間取り等に関するアンケート調査を行った。

また、当時災害公営住宅の担当者へのヒアリングを行い、災害公営住宅建設の背景やプランの特徴を把握した。

2. 集落の復興概況

竹浦集落は宮城県牡鹿郡女川町の離半島部に位置する漁村集落の一つ。2011 年東日本大震災によって集落内では、16 名が犠牲となり、63 戸中 61 戸が全壊、公共空間は高台の神社のみが残っている。漁業も壊滅状態となった。竹浦は従前の集落近くに「南地区」「北地区」の 2 カ所の高台住宅団地を造成し高台移転を行った。南地区は主に 2016 年、北地区は 2017 年に入居。現在約 6 年が経過した。

震災前の人口は 188 名 68 世帯、現在の人口は 85 名 36 世帯と大きく減少している。令和 2 年現在、竹浦の高齢化率は 42.35%と全国平均を大きく上回っている。漁業者は震災前の約 1/3 に減少し、後継者不足も大きな課題である。

また、それにより春祭り等の行事は縮小傾向にあるが、女川町の伝統文化である「獅子振り」を女性や子どもにも早くから継承し、多世代交流が行われている。

3. 空間の変容と利用実態

3-1 集落の全体像

集落内の空間変容と利用実態を図 2 に示す。

造成地の選定には、「少しでも早く再建すること」を望む声(ほとんどが漁業者)と「海が見えること」を望む声の 2 つがあった。そのため、海は見えないが工期の短い南地区と海の見える北地区という 2 カ所の宅地に分かれた。

南地区は 9 戸(すべて自立再建住宅)、北地区は 23 戸(自立再建住宅 13 戸、災害公営住宅 10 戸)の住宅が建っている。その内災害公営住宅 1 戸は空き家である。また、災害公営住宅全戸と自立再建住宅の 10 戸では集落の景観に合った統一の外観デザインとなっている。

3-2 日常生活のための空間

震災前の住宅は「オカミ」「ザシキ」と呼ばれる和室に縁側があり、シンク付きの外流しや納屋があった。加えて、玄関は南向きが多かった。

現在は災害公営住宅と自立再建住宅合わせて 32 棟中 28 棟の家の玄関が南側を向いていた。自立再建住宅は 22 棟中 15 棟でウッドデッキや濡れ縁などの半屋外空間が見られた。また、和室中心から洋室を中心とした現代風のプランとなった住宅が多い。その他、現在漁業を行っている世帯ではなくても、シンク付きの外流しや納屋といった漁村集落特有の特徴を持つ住宅もみられた。(図 1・3)

災害公営住宅は女川町内で一律のプランとなっており、漁村集落の特性を反映した特徴をもつ。そのため LDK だけでなく、DK プランも計画され、外部には下屋やシンク付きの外流しが全世帯についている。(図 4)

3-3 人の集う空間

震災前は集会所・神社・民宿(4 軒)・酒屋・タバコ屋・子ども広場・ゲートボール場があったが神社以外は流失した。集会所は北地区に再建され、公的な集まりだけでなく、獅子振りの練習会や出前講座等、人の集まる場として震災前と変わらずに使われている。一方で、がれき撤去をきっかけにダイビング施設が建設された。

また、北地区・南地区に公園が 1 カ所ずつ整備された。しかし、公園に限らず空気が至る所にあるため、子どもはあまり使わないが北地区の公園は時々ペタンクを行う場所として使われている。

海を見る場所は北地区では 7 世帯中 5 世帯が「家の窓から見える」と答えた。南地区は 2 階の窓からみえるが、住宅の 1 階や外から見ることはできない。また、15 名の内 7 名が神社や海岸を経由地として、「散歩する」と答えた。

魚を捌く場所は震災前と変わらず海岸で捌いて、殻などは海に捨てる住民もいれば、外流しを利用する住民もいる。漁業者は船の上で捌いてから帰宅するようだ。

3-4 漁業空間

震災前は2カ所のカキ処理場と2階建ての漁業支部会館があった。カキ処理場は元々各集落にあったが、一度に多くの施設を再建することは難しく、竹浦では再建されなかった。漁業支部会館は震災後すぐに女川町内の各集落共通で話し合いの空間として番屋が設置され、これが代替施設となった。現在集会所で漁業支部の総会などが行われているため、番屋は使われていないが、あえて解体せず他業者へ貸している。

また、震災前は住宅の敷地内や海の近くに納屋を設け、漁業に使用する道具やストッカーを収納や養殖の作業に使っていた。現在は住宅から海まで離れたため、すぐに道具をとりに行くことができるように海岸近く漁業者共同の小屋や、移転元地に割り当てられたコンテナのみに漁業の道具を収納し、作業を行っている。しかし、漁業者の働き方自体は変わらない。

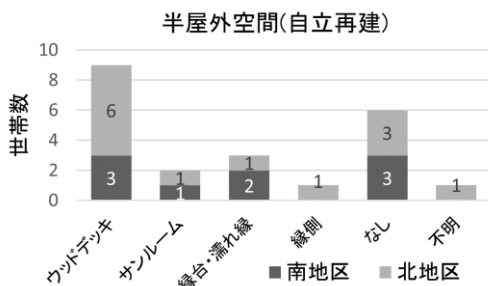


図1 半屋外空間の設置状況



4. まとめ

漁業者は減少したものの、震災前と同様に港近くで漁業を行っている。各住宅にはストッカー、作業着を干す場所等、漁村特有の居住空間を継承して、海を中心とした生活を送っていることがわかった。また獅子振りの継承などによって住民同士の距離は近く、集落独自のコミュニティを築いている。

海へのアクセスは遠くなり、自家用車で海岸まで移動する人が増えた。一方、家から海を眺めたり、集落内を散歩している方が多く、震災前のように家やその周辺から海が見えることを大切にしていることが分かった。

将来、人口減少や漁業の後継者不足がますます懸念される。この魅力的な空間をどのように継続していくかが今後の課題である。

【参考文献】

- (1)羽島愛奈:漁村集落の生活行為とコミュニケーション空間の利用—宮城県女川町竹浦集落を事例として— 日本女子大学紀要 家政学部 2014.3
- (2)女川町:人口世帯集計表(平成23年2月28日現在) 2023.12.2 閲覧 <https://www.town.onagawa.miyagi.jp/gyouseikujinkou.files/h2302.html>
- (3)女川町:人口世帯集計表(令和5年10月31日現在) 2023.12.2 閲覧 <https://www.town.onagawa.miyagi.jp/gyouseikujinkou.files/r0510.html>
- (4)女川町:土地利用計画平面図1:2000 女川町竹浦北地区 女川町より提供 2016.8 作成
- (5)女川町:復興記録誌 p98.99 令和3年3月 <https://www.town.onagawa.miyagi.jp/hukkoukirokushi/html5.html#page=101>
- (6)女川町:女川町離半島部災害公営住宅(木造戸建)基本標準プラン https://www.town.onagawa.miyagi.jp/pdf/20140304_model_room.pdf 2023.12.22

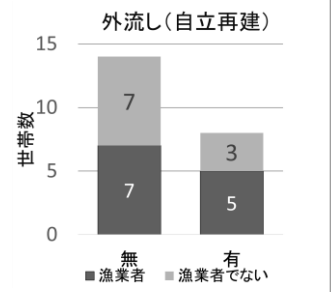


図3 外流し設置状況

